

地域とともにある

勢いのある学校

No. 13 (R2. 8. 5発行) 文責 校長 福田雅也

高き志【こころざし】

顧客は「未来の彼ら」

最近ネット上で気になる見出しを見つけました。

聖域からサービス業へ「教師という接客業」

という見出しです。興味があつたので読み進めていると、以前から私が考えていたことと重なり、とても納得のいく部分があつたので少し紹介します。【枠内はネット記事からの引用です】

以前、「奇跡の学校作り」として有名な荒瀬克己先生にインタビューしたことがある。

それまで年に6人程度だった国公立大学の現役合格者数を、たった6年で20倍の120人に急増させた京都市立堀川高等学校の校長として、当時名を馳せた人物だ。

「私たちは普通のサービス業ではなく、ちょっと変わったサービス業に就いています。普通のサービス業の場合は相手の望むものすべてを提供するわけですが、私たちは生徒が望んでも提供しない場合があります。反対に、彼らが望まなくても提供する場合もあるのです。彼らが将来困らないかどうかというのが、提供するかどうかの基準です。顧客は十年後の彼ら。つまり、未来の彼らからの要望にもとづいてやっているというわけです」

これならわかる。学校とは子どもたちが社会に出るための準備をする場所だと考えると、顧客は「目の前の生徒」ではなく、「未来の彼ら」というわけだ。

昨年度の学校便り35号に「教師を評価するのは…」という記事を書きました。私はその中で、「教師の本当の評価は、大人になった子どもたちが返してくれるのではないか」と書いています。この私の思いと重なる考え方だと感じたのです。

一昔前まで教師は「聖職」と言われていました。体罰までが容認されていた時代には、教師は子供にとっても保護者にとっても絶対的な存在だったようです。しかし、時代は変わって、教師がサービス業化してきていることに間違いはありません。ですから、顧客意識とまではいなくても、保護者の願いを受け止め、あくまでも子どもたちの立場に立つて成果を目指していくべきであることに大きな異存はありません。しかし、企業論理の中でのサービス業と決定的に異なる部分があることをみんなが忘れてはいけないと思います。それが「顧客は『未来の彼ら』」、「教師を本当に評価するのは、大人になった子どもたち」という部分だと思ひます。

上の文章で、「みんな」という言葉をあえて使いました。この考え方は、私たち教師だけが持っているだけでは足りないように思ひます。それだけでは「未来の彼ら」のためにならないのです。学校だけではなく、保護者はもちろん、地域の方々、社会全体で共有し、ともに手を携えて子供たちの未来を保障していかなければいけないと強く感じる機会となりました。

特別な夏となり、2週間間しかない夏休みですが、いよいよ明日から始まります。ここへきて、県のリスクレベルが4に引き上げられ、県外への移動自粛や三密の回避が県民に求められています。自宅で過ごすことが多くなるかと思ひますが、どうか子供たちの身近な場所での感染拡大とならない配慮で過ごす夏休みにしていただければと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。